

同志社 福祉研究

1961-6-

同志社大学社会福祉研究会

大塚達雄

大
名
誉
教
授
学

に聞く

同志社の社会福祉教育

聞き手

河野 仁 昭

(社史資料室長)

海軍経理学校

——先生のお父さんは、大正時代から同志社大学神学部の教授であられた大塚節治先生ですから、当然、京都市のお生まれですね。

大塚 そうです、京都市。(大正十三年四月十四日生まれ)。

——月並みな質問で申し訳ないですが、小学校も、中学校も京都市で？

大塚 小学校は京都師範学校の付属小学校で、裏千家の今の家元、千宗室さんが一年以上にいました。

——中学は同志社へ？

大塚 いや、京都府立一中です。

——当然、同志社と思いましたが、そうですね。一中から同志社大学へ入られて、卒業後、教授になられた方は、わりと多いですね。

大塚 そうですか。

——はい、むかしのことですけど。先生も、大学は同志社でしょ。

大塚 旧制大学の最後でした。戦争が終ったからの入学です。

——大学予科へ入られたんですか。

大塚 いや、本科です。予科に当たる部分は、海軍経理学校ですね。

——すると、一中から海軍経理学校へ？

大塚 そうですね。それから同志社。

——当時はそういうコースがあったわけですね。

大塚 戦争に負けて帰ってきた復員組の秀才が集まりましたよ。北垣宗治さん(大学名譽教授)もその中の一人です。

——海軍経理学校は当時のエリート・コースだったわけでしょう。

大塚 まあ、そうですね。

——優秀な学生が集まるとなると、授業のレベルは高いわけですか。

大塚 高かったです。いい教授がいましたね。

——そうですね、教授もよかったです。

大塚 よかったです。いい先生を揃えていました。

——幕末に新島襄は幕府の軍艦教授所で勉強したわけですが、入所した理由は、そこに優れた数学の先生がいたからだったんですね。幕府の威信にかけて、優秀な教授スタッ



大塚達雄名誉教授

フを揃えていたんじゃないかと、ふと思えます。帝国海軍の威信にかけて、海軍経理学校のスタッフは優秀な人材を集める、そういうところがあつたかもしれないですね。

大塚 そういふところがあつたかもしれないません。とにかく、普通の大学よりはよく勉強させてくれた、そういう感じを持っています。すると、学校の中は軍隊のようなものではなくて……。

大塚 ちがいますよ。普通の、いわば専門学校なんです。とても充実した授業でした。

でも、教授は普通の大学とちがつてこわくなかったですか。威張っているとか。

大塚 海軍は、教授にかぎらず、あまり威張らんとこなんです。

失礼しました(笑)。それで、先生は当然、経理学校を卒業されて……。

大塚 しました。海軍主計少尉ですよ。

卒業されたら勤務につかれるわけでしょう。

大塚 つきました。戦艦日向に乗りましてね。

——そうですか、軍艦に乗っておられたんですか。軍艦もずいぶん被害をこうむったようですけど、危い目に遭われるというようなことはなかったですか。

大塚 戦争の末期からでしたからね、浮流機雷ぐらいを気をつけておれば、危険なことはもうなかったですよ。もともと私は、海と船が大好きなんです。だから、怖いなどとは思わなかった。

——海のない京都育ちにしては珍しいですね。

大塚 いや、京都育ちやから、逆に海や船に憧れるということかもしれませんよ。

最後の旧制大学

——すると、終戦になって、旧制の同志社大学へ入られたわけですね。

大塚 最後の、駆け込み入学みたいなかつ

こうで。(笑)

——そのころの同志社大学は、文学部(神学科・英文学科・文化学科・社会科学)、法学部(法律学科・政治学科・経済学科)の二学部で、先生が入学されたのは法経学部の経済学科ですね、たしか。

大塚 そうです。

——総長は牧野虎次先生?

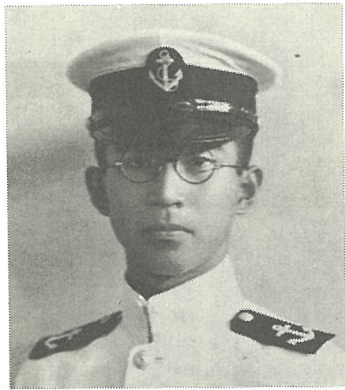
大塚 そうでした。そして間もなく湯浅(八郎)先生になって、それから大塚(節治)に替りました。

——そのころの同志社大学で、特に印象に残っていること、なにかございますか。戦争中の荒廃からまだ全くといいほど立ち直れてなかったわけでしょう。

大塚 何といつても食べる物がなくて、芋の蔓や相国寺の池の蛙に随分世話になりました。(笑)

——先生方の印象はいかがですか。記憶に残っておられる方とか。

大塚 中西仁三先生とか、黒松巖先生とか、それぞれ特色はありました。特に中西先生は授業中に面白いことばかりいわれるものだから、印象に残っています。黒松先生はまた別



海軍経理学校時代

の意味で……。

ただ、こう思うと思いつていたように受けとられるかもしれませんが、私は先にいった経理学校で、全国的に著名な先生方の教えを受けてきたでしょう。東大や東京商大等の錚々たる教授連中の教えをうけたという自負だけが残っているのかもしれませんが。

社会福祉学への関心

——先生は経済学専攻に籍を置いておられながら、ケースワークとか、社会福祉に学生時代から関心を持っておられたように思うんですが、なにか動機になることがありましたか。

たんですか。

大塚 さあ、なんでやったか、私自身にもようわかりませんなあ。(笑)

ただ、さつきちょっと申しましたように、経済の授業があまり面白くなかったんです。それで、なにか面白いものはないかと思いついたんです。そしたら、外国人であるドロシー・デッソー先生なんかケースワークというものをやっていることを知って、希望するならきてみないかと時間外授業をしてくるようになったので参加しました。

——同志社には社会福祉の伝統があるといえるでしょうけれども、ケースワークなどが教えられる日本人教員はいなかったんですね。

大塚 だれもいませんでした。

——戦前の文学部神学科の中に、社会事業専攻というのがあったでしょう(昭和五年設置)、竹中勝男先生などが中心で。

大塚 私は詳しいことは知りませんが、竹中先生の専門は社会学でした。

——同志社の社会福祉の伝統は古いけれども、ケースワークとかグループ・ワーク、カウンセリングなどは戦後に導入されたわけ

すね、外国人教員によって。

大塚 そうでしょう、新しいんです。

——デッソー先生のほかに、どんな先生がおられたんですか。

大塚 ミセス・グラントも教えていましたね。それからミセス・ウッドとか。

D・デッソー先生

——中心はやはりデッソー先生で……。

大塚 そうでした。

——どんな方なんですか、デッソー先生という方は。話にはよく聞きますけど。

大塚 まあ、私にとっては、デッソー先生のおかげで今日の私があるといってもいいような方で……。

——同志社大学のカウンセリングもそのようですね。

大塚 そうです、カウンセラーになる人はみな、デッソー先生の指導を受けましたから。まあ、偉い人といえればいいか、変った人というたらいいか。

——教え方に特色があるんですか。

大塚 ありますねえ。あの人の教え方とい



ドロシー・デッソー先生

うか、鍛え方というのは、日本人の教師が決してやらないことをやってくれるんですね。それはもう、非常に厳しいわけですよ。それで、多くの学生たちは嫌がるわけです。逃げよう、逃げようとしていました。

——大塚先生はよく頑張りとおされましたね。(笑)

大塚 私はあまのじやくだから(笑)。やっぱり、こういうところで頑張らんといかんのやと……。

——指導は英語ですか。

大塚 それがね、デッソー先生は変っているんですよ。「今の日本の学生は、英語でやつたらだれもわからん」(笑)

——まア、そりやそうでしょうけど。

大塚 「私は英語を教えるに來たのと違う。だから、ええ通訳をつけなさい」というわけで、デッソー先生の授業の通訳を上野夫人がつとめました。

——上野直藏先生の奥さんですか。

大塚 そうです。これがなかなかの名通訳で、京都弁でやるわけですよ。(笑)

——そりや、すごい。(笑)

大塚 ほんとに大したものでした。そのおかげで私なんかできるようになったみたいなのです。住谷夫人も通訳をすることがありました。

——デッソー先生は日本語は全然だめだったんですか。

大塚 そうでもないんですけどね、「私は英語を教えるにきたのと違うんだから」と、あまりしゃべりませんでした。

——デッソー先生は晩年、葵橋ファミリークリニックだったか、そういうのをやっておられましたね。わたしは手伝っていた女性を知っているんですが。すると、あそこでも通訳をつけて……。

大塚 もちろんそうです。



葵橋ファミリークリニックの集りで、O. ケーリ夫人と

——先生もずっとお手伝いなさっていたようですが。

大塚 私は通訳なんかできませんけれども、ヘルパーみたいな形でした。デッソー先生は日本人の生活感情とか習慣とかがわからない点がありありますのでね、「日本人はこういうふうに見えるんです」と、横から言っただけ。すると、「ああ、そうか」ということ。

——大学ご卒業は、昭和二十四年三月でしたか。

京都社会福祉研究所時代

大塚 そうです。

——京都市の社会福祉研究所にとめられるのは、卒業されてからですか。

大塚 在学中から関係はありました。

——経理学校から旧制大学の経済学専攻に進まれたからといって、企業などに就職しなきゃならん理由はありませんけどね。学生時代のサイドワークがお役にたったみたいで。

大塚 というよりも、あの時代はすごい就職難で、就職は非常にむずかしかったんですよ。

——よくわかります。わたしも似たような時代を生きてきましたから。

大塚 それで、何をみこまれたのか知りませんが、デッソー先生が私を京都市に推薦してくれたんです。

——社会福祉研究所というのは、なにをするところですか。

大塚 おもな仕事は教育です。デッソー先生を手伝いましてね。

——相手はやはり学生ですか。

大塚 京都市の職員です。

——なるほど、社会福祉の導入というか理解が、非常にやかましくいわれていたときで

したから。社会福祉の専門職を養成するのが任務です。

大塚 まあ、それもありますけど、京都市の職員が主でした。

——じゃあ、京都市の福祉行政面で重要なお仕事をされるようになる職員も……。

大塚 沢山の人がそうになりました。福祉事務所の所長とか、民生局長とか、重要なポストにつきましたね。

——そういう点でも有意義なお仕事だったということになりますね。

大塚 まあ、そうですね。

文学部社会福祉学専攻

——文学部社会学科で教えられるのは、最初は京都市のお仕事と並行してですか。

大塚 そうでした。専任のかたちではなかったと思います。

——新制の同志社大学に社会福祉学専攻が設けられたとき、中心のスタッフはどういう先生方ですか。

大塚 嶋田啓一郎先生を柱に、方法論はさつき言ったデッソー先生が、やはり中心です

よ。それからグラント夫人、メリー・ウッド先生、外国人ばかりですわ、ちゃんと教えてくれたのは。日本人は小倉さんと同室でしたし、井垣さんは隣室でした。

——アメリカ人の教え方には、特色がありますか。

大塚 そりゃ、あります。

——たとえばどんな？

大塚 日本人の先生だと、一方的に教え込む講義が中心ですわ。

——そうですね、現在も。

大塚 ところが、彼女たちはちがうんです。特にドロシー・デッソーがそうでしたけれども、講義はあまりしないで、学生に質問するんです。「あなたはこう思いますか」とか。

——みんなに？

大塚 そうですよ。普通は黙って座っていたらいいんですが、デッソー先生の教室ではそういうわけにいかんわけです、いつ質問されるかわからない。そういう授業に日本人は馴れていませんから、学生に嫌われました。

——学生にとってはしんどいわけですね。

大塚 質問に対して答えが用意できているとか、しゃべりたいことがあるときはよろし



社会福祉学専攻の先生たち

いけれども、そうでないこともあるから、そんなとき質問されたらもう、お手あげですわ。だから、嫌われたわけですよ。

——でも、鍛えられますね。

大塚 そりゃ、鍛えられますよ。それで私もそういうやり方を受け継ぎましたから。

——すると、嫌われることも覚悟で……。

大塚 嫌われもしました。(笑)

——学生に対しては、最も親切な授業なんでしょうけど。先生のほうも、テキストや

ノートに頼つてばかりいられないからしんどいでしょうけど。

大塚 授業となると、デッソー先生は必死ですからね、学生たちに対してもそれだけ厳しい。出席もすぐうるさく言いましてね。

——授業を受ける学生の数は、余り多いとやれませんか、せいぜい三十人から四十人までですか。

大塚 デッソー先生の授業はそんな人数じゃなかったですよ。六七十人から多いときは百人くらいの教室でやっていました。

——それで学生一人一人にしゃべらすことが出来るんですか。

大塚 学生に質問して、しゃべらせて、やってるんです。出来ないことじゃないんだと思います。

——先生はアメリカへ在外研究にいらっしやったでしょう。

大塚 行きました。

——大学はどこですか。

大塚 シカゴ大学。

——大学院ですね、籍を置かれたのは。

大塚 そうですね。

——シカゴ大学は社会福祉学はいいんですか。

か。

大塚 いいんです、特に社会福祉は。

——教え方はやはりデッソー先生のようなやり方で……。

大塚 同じようなものです。要するに教師があまりしゃべらないで、学生にしゃべらせる。そこに重点が置かれていますね。学生から引き出すわけで、そこが非常に上手なんです。日本の教師は下手ですわ。

——わたしは体験がないのでわかりませんが、能力開発方式とでもいうんでしょうか。

大塚 そういうことです。とにかく、教師が一方的にしゃべつてすませる授業だったら、しゃべる材料はこちらにいっぱいあるわけだから、楽ですよ。向こうの教師は、自分はいましゃべらないで、学生にしゃべらせるようにする。予想外の質問がでたりもしますから、そういう授業のほうがうんとしんどいですよ。

——日本ではせいぜいゼミの教室くらいなものですか、似たような授業は。

大塚 そうですね、ゼミくらいです。

卒業生の針路

——社会福祉学専攻の卒業生たちは、社会福祉の仕事に就職する人が多いですか。

大塚 昔の大先輩の時代は別として、最近はそのわりに多くなりました。はじめのうちはそういう仕事につきたがる学生は、あまりいなかったですよ。だから求人側のほうから、「社会福祉教えるいうけど、一人もきやへんがな」(笑)。実際、歯がゆかったですよ。このころは社会福祉をやろうという学生が、だんだん出てくるようになりました。

——社会福祉プロパーの受け入れ機関はどうですか。多くなりましたか。

大塚 ふえました、全国的に。

——どういう仕事につく人が多いですか、社会福祉事務所とか、いろんな福祉施設があるように思いますけど。

大塚 そうですね、福祉事務所へ行ったがる人なんか、わりと多いですよ。私たちの目から見て楽な所で、自分が汚れるような仕事は敬遠しがちです。

——老人ホームとか、病院のカウンセラー

とか、心身障害児の施設とかいった臨床的な仕事じゃなくて……。

大塚 病院のカウンセラーなど、やってみようという人が最近出てきました。少しまえまでは希望者がなかったですよ。でも、社会福祉の事務だったら汚れずに済むかというと、そんなものではないんですけどね。

——社会福祉というと、キリスト教主義の同志社には伝統があつて、よく例に出される人ですが家庭学校の留岡幸助、それから救世軍の山室軍平、貧者の友高橋元一郎。高橋なんか昭和初年に東京の失業者救済センターかなにかでテント生活して、肺結核に感染して亡くなりますけど、そういう福祉の在り方は是非はともかく、生涯をそれに捧げた人はわりと多いでしょう。

大塚 いるんです。いるんだけれども、それが受け継がれ、発展してきたかというところ、かならずしもそうならなかったんですな。だから私、同志社教育のどこかに欠陥があるんじゃないかと、あるとき考えてみたこともあるんです。とにかく、伝統もあるし、一人一人の学生についていえば、それができる力を持つているのがありますのでね。ちよつとぐら

い汚れることをいとわないで、その力を発揮していい仕事をしてもらいたいと願っているんです。

——最近、三Kとかいって、汚れたりきつかったりする仕事は嫌われている。これは全国の若者たち全般についていえることのように



社会福祉学専攻の卒業生達と



福祉キャンプ場開き（大原百井町）

ですから、同志社だけの問題ではありませんけどね。でも、病院の臨牀的な仕事につく卒業生も出てきているようですし、実際にその仕事にたずさわってみたら、案外やりがいがあると感じますけど。困っている人、弱っている人、病んでいる人などを援助する仕事なんですよ。

大塚 そうです。

——最近、若いOLなどで、もう少しやりがいのある仕事をしたいからと、会社を辞めて老人介護だとか社会福祉の仕事に転業する人が出てきていると、テレビのニュースで見ましたけど、たしかにいいことでしょうか？

大塚 続けるというのはむずかしいかもしれません。

——ボランティアをずっと続けている人はかなりいますね、ライト・ハウスなどへ行ってみますと。

大塚 いるんですよ。皆さんなかなか熱心で、よくやって下さっています。私も率先窮行が大切と障害児キャンプなど諸々の障害児サービスにかかわって四十年になります。

——同志社で社会福祉を学んだ人は、その知識や技能を生かして、せめてボランティアでもやって下さると。でも、という具合がわるいですが。

大塚 おっしゃるとおりです。

学生の課外活動

——ところで、先生は長く課外体育委員長

をしておられましたね。

大塚 そうです、長かったですよ。それから、ヨット部の部長。

——ヨット部の部長は、やはり海と船が大好きだから。（笑）

大塚 まア、そうですね。ヨット部の連中というところ、これはもう、私の息子や娘みたいなもので……。最近はこのちのちのほうが無礼していますけれども。

——毎年のように優勝して。

大塚 同志社のヨットは強いんですよ。おかげで私もええめさしてもらいました、なんべんも優勝しましたから。

——ヨット・レースというのは、わたしなんか見ていてしんきくさいですけど（笑）、先生は興味しんしんで。

大塚 しんきくさいことはないですなア、うちの部が出ていますからね。

——それも大いにおありでしょうけど、やはり、海と船が本質的に好きだからとちがいますか。

大塚 それはあるでしょうね。

巖父・大塚節治先生

——今日、先生にお目にかかったらおたずねしようと思っていましたことの一つは、節治先生のことなんです。わたしは先生の総長の任期の終りころから、ほんの少しお話させていただけようになつたわけで。いまのような仕事をするようになるのだつたら、お聞きしておくべきだつたことがいっぱいありますので、すごく残念なんです。まア『回顧七十七年』（同朋社、一九七七年）にいろいろ書かれていますから、大変恩恵をこうむっていますけれども。

大塚 在職期間が長かつたですからね。

——それに重要なポストを歴任されましたから……。直接お話をうかがつたことで今も記憶に残っていますことの一つは、「総長などをやっていると、研究のほうが留守になつてしまつて、研究者としては大変なマイナスだ」という意味のことを言われて、ハツとしたことがありました。

大塚 そうでしょうね、それはもう言つたとおりですからね。しよつちゅう、「こういう

仕事をしていると、自分の本当にやりたいと思つていた学問のほうがお留守になつて、だぶおくれた」と、よく言つていました。

——ご家庭では厳格なお父さんでしたか。

大塚 しつてとか、厳しかつたですよ。

——先生が経理学校へ行きたいと言われたとき、反対はされませんでしたか。

大塚 いや、全然。

——時代が時代だつたからでしょうか。

大塚 それもあつたかもしれませんが。

——学者になれとは言われなかつたですか。

大塚 それは盛んに言いました、「これだけいろんな本を集めてあるのに、利用しないのはもったいないぞ」と言つて。「本が使えるだけでも得じゃないか」と（笑）。そういう言い方もしていました。

——戦争に負けたおかげで、先生も学者・教育者になられたわけですが。

大塚 全然、畑ちがひになりました。

——でも、素人考えでは、キリスト教神学と社会福祉というのは、根っここのところ同じものじゃないかと思えますけど。社会福祉というものは日本の伝統にはなくて、どうも

明治以降のキリスト教と一緒に入つてきているように見えましてね、だからそう思うんです。

大塚 そうです、特に私がやっているようなことは、もともとすぐ関連があるはずですよ。それが枝分かれして、分かれたほうだけになつてしまつたわけです。

——どうも長時間、同志社教育にとつても有意義なお話を、ありがとうございました。

（一九九四年八月二日 大塚名誉教授宅で収録）